



小学生(中学年)向け



『あるヘラジカの物語』

星野道夫／原案 鈴木まもる／絵と文
あすなろ書房 ¥1,500 (税別)

互いの角をからませ骨になった2頭のヘラジカが裏表紙に写し出されている。何があったのか…。星野道夫の遺作である1枚の写真に触発され生まれた絵本。自然の中に営まれる生命という普遍的なテーマを語りかけてくる動物たちのドラマ。



『いたずらのすきなけんちくか』

安藤忠雄／原作 はたこうしろう／絵
小学館 ¥1,600 (税別)

「こども本の森」にやってきたりょうたとりさの兄妹は、怪しいおじさんに出会う。おじさんはこの建物を設計した建築家で、建物に仕込んだいたずらを二人に教えてくれる。建築について子どもにわかりやすく伝える絵本。



『つれてこられただけなのに』

小宮輝之／監修 有沢重雄／構成・文 今井桂三、むらもとちひろ、ウエタケヨーコ、サトウマサノリ／絵 偕成社 ¥1,000 (税別)

外来生物が日本に来た理由をユーモラスに紹介。外来生物というと「悪者」と考えがちだが、連れてこられたのは食用、観賞用、緑化など様々な人間の都合から。彼らの言い分を知ると、外来生物の抱えている気持ちに分かるかもしれない。



『もしもトイレがなかったら』

加藤篤／著
少年写真新聞社 ¥1,600 (税別)

トイレの成り立ちや災害時のトイレの種類、環境問題とトイレの変化について書かれている。また、うちの正体や排泄の大切さ、新型コロナウイルス感染症を防ぐトイレの使い方にも触れている。トイレの大切さを気づかせてくれる一冊。



『やとのいえ』

八尾慶次／作
偕成社 ¥1,800 (税別)

「やと」とは、なだらかな丘にはさまれた浅い谷のこと。モデルになった多摩丘陵の「やと」では、昔から人々が田んぼや畑を切り開いて暮らしてきた。一軒の農家とその家族の150年の営みを、道端の十六羅漢さんの視点で描く。



『りんごだんだん』

小川忠博／写真と文
あすなろ書房 ¥1,300 (税別)

346日間、ひとつのりんごを見つめ続け、その変容していくさまをじっくり観察した一冊。ラストの変わり果てたりんごの姿は、まさに“土に還る”という状態を表している。最後まで目が離せない驚愕の写真絵本。



『ルドルフとノラねこブッチー』

齊藤洋／作 杉浦範茂／絵
講談社 ¥1,500 (税別)

ルドルフシリーズ第5弾はノラ猫ブッチーの元飼主探し。冒険の舞台は甲府で、県民に馴染みがある場所や歴史が登場。教養もあり博識のイッパイアッテナが、今回はまたカッコよすぎる。ルドルフと仲間の猫の思いやりある関係も心地よい。



『わたしたちのカメムシずかん』

鈴木海花／文 はたこうしろう／絵
福音館書店 ¥1,300 (税別)

岩手県の葛巻町で実際にあった話を基にした絵本。この町では毎年、大量のカメムシが発生し、人々を困らせていた。小学校の校長先生は朝礼でカメムシ調べを提案する。最初は戸惑っていた子どもたちも、やがて調べるのが楽しくなり…。

その他のおすすめの本

『うちにカブトガニがやってきた！？』

石井里津子／文 松本麻希／絵 学研プラス ¥1,400 (税別)

『お蚕さんから糸と綿と』

大西暢夫／著 アリス館 ¥1,500 (税別)

『おじいちゃんとの最後の旅』

ウルフ・スタルク／作 キティ・クローザー／絵 菱木晃子／訳 徳間書店 ¥1,700 (税別)

『かじ屋と妖精たち』

脇明子／編訳 岩波書店 ¥840 (税別)

『神様のパッチワーク』

山本悦子／作 佐藤真紀子／絵 ポプラ社 ¥1,300 (税別)

『きみの声がききたくて』

オーウェン・コルファー／作 P.J. リンチ／絵 横山和江／訳 文研出版 ¥1,400 (税別)

『セイギのミカタ』

佐藤まどか／作 イシヤマアズサ／絵 フレーベル館 ¥1,300 (税別)

『7年目のランドセル』

内堀タケシ／写真・文 国土社 ¥2,000 (税別)

『俳句ステップ!』

おおぎやなぎちか／作 イシヤマアズサ／絵 佼成出版社 ¥1,300 (税別)

『はじまりはたき火』

まつむらゆりこ／作 小林マキ／絵 福音館書店 ¥1,400 (税別)

『プラスチックのうみ』

ミシェル・ロード／作 ジュリア・プラットマン／絵 川上拓土／訳 磯辺篤彦／監修 小学館 ¥1,500 (税別)

『わたしたちの家が火事です』

ジャネット・ウィンター／文・絵 福本友美子／訳 鈴木出版 ¥1,500 (税別)